

第三の旅人

——ルカ伝第24章13～31節——

小池辰雄

1990年4月15日

キリストが道連れになつてくださる 詩の世界が即現実 永遠を生きている人

【ルカ24】

¹³ 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオと
 いう村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵ 語りかつ論じあう
 程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶ されど彼らの目遮えられて、イ
 エスたるを認むること能わず。¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつ
 互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、¹⁸ その一人な
 るクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り
 此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』¹⁹ イエス言い給う『如何なる事ぞ』
 答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業に
 も言にも能力ある預言者なりしに、²⁰ 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定め
 んとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹ 我らはイスラエルを贖うべき者は、
 この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三
 日めなるが、²² なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙
 く墓に往きたるに、²³ 尸体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは
 活き給うと告げたりと言う。²⁴ 我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、
 正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』²⁵ イエス言い給う『あ
 あ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鍛²⁶き者よ。²⁶ キリ
 ストは必ず此らの苦難を受けて、其の榮光に入るべきならずや』²⁷ かくてモ
 ーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き
 示したもう。²⁸ 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、
 乃²⁹ち留らんとて入りたもう。³⁰ 共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて
 祝し、擘³¹きて与え給えば、彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエ
 ス見えずなり給う。



●キリストが道連れになつてくださる

もう皆さんがあまりにもよくご承知のルカ伝24章です。特にこの二人の旅人にキリストがついて来て、そして、問答を始める。そして、

「何事か？」

なんて、キリストはしらばつくれて聞いている。おもしろいですね、

「何をお前たちは……？」

と。ところが、

「お前さんは聞いてないか」

なんて言つて問答している。そして今度は、キリストが本格的にしゃべりだした。あの「エマオ途上」の有名なキリストの絵がありますね。見えざるキリストだが、実はこの場合は旅人たちには見えているわけだ。そして、ちゃんと問答している。まあ、実に劇的なところです。だから、聖書は正にドラマなんですね。お説教ではない。何回読んでも、私たちはここを読んでいて、この旅人たちと同じように、心がうちに燃えるというわけです。

キリストは、

「火を投ぜんために、剣を投ぜんためにやつて來た」

と、烈しいことを仰つた。いわゆる天剣です、人を活かす剣です。殺す剣ではない。また、本当に燃やす火であつて、消す火ではない。

私たちはそのように、どんなに独りで歩いていても——私は夜、詩を書いているんです。昼間はそれに関わる参考書を読んで、そして、夜は大体9時以後だね、ここは第三の旅人だが、正に私にとつては第一の旅人です。私は独り歩きだから——キリストがその道連れになつてください。あの召団讃美歌の第一番（「わが道伴れ」）と同じです。正直、御靈のキリスト、あるいはキリストの御靈に導かれて、燃やされて書いています。

だから、そんなことを言つては少し大袈裟かもしませんが、普通の詩人と違うんです。もともと、私は普通の詩人ではないんだから。正直、凄い文句が与えられます。始めつからずつと書いているわけではないですよ。ゲーテの『ファウスト』もいろいろなところから総合されるんですが、その時に閃きがくるその題材をとらえて書いている。私はゲーテみたいにドラマは書けません。けれども、ダンテの『神曲』式にドラマチックなエpos、叙事詩ということになるだろうと思います。大丈夫、書きます。もう、ちゃんと見当がつきました。それは一万行くらいにはなります。

●詩の世界が即現実

書いているときは、本当に、何と言うかな、もう天的現実の中にはいるね。だから、楽しくてしようがない。こんなのは私は初めて経験している。ということは、歳も80を越えるとね、地上にもう未練がないわけだよな。全く、形容詞ではなくて、天的現実なんです。



詩の世界が即、現実なんです。しかも、永遠の現在において、現然たるもので。そんなことですから、これは出来上がるまではどなたにもお見せしませんけれども、楽しみにしてください。

「私はもうあと10年生きていません。どうしても死にます」

という人にはちょっと見せてもいいけれども（笑）。あまり残念がらしてはわるいから。

あなた方にとつても、何をなさつても、結局は我々の人生は旅だからね。このエマオ途上のキリストのごとく、キリストが語らつてくださっている。エマオ途上のこの一人は、イエスを招いて食事して、イエスがパンを裂いたら、

「あつ、これはキリストだ」

と分かつた。そしたら、「消えた」と書いてあるが、あなた方は始めから

「主さま！」

というわけで歩くわけだ。だから、夜道を歩いても、女のひとでもひとつも恐くないよ。キリストが護り給う。夜道を歩けとは言つてません。試してはいけないんだからね、キリストを。キリストを試したら、とんでもないことになる。已むを得ず夜道を歩くときには大丈夫だというはなしです。それは、聖靈の權威というのは不思議なものですからね、本当に。それは光りを放つかもしれないよ。正直、私のある友人は、

「小池君は光つていた。びっくりしたよ」

とはつきり言いました。二度か三度聞いた。その人はクリスチヤンでも何でもないんだよな。

●永遠を生きている人

そういうことでね、

「汝らは世の光なり」

という。

「はい、そうです。あなたが光つてくださいります」

ということで、何でも、

「はい、そうです」

と言つて受けとつていかなくてはダメです。

「そうでしょうか」

ではないんだよ。キリストの權威ある言葉はもう無条件に受けとつていく。そうすると、その世界に入るからね。キリストは共に歩いてくださっている。共にご飯を食べてくださる。お独りで食べてらつしやる方もあるでしょう。キリストと一緒に食べているんだというわけです。キリストは同時に幾人とも一緒に食べられるんだから。一緒に歩けるんだから。御靈のキリストというのはそういうのだから。

「あつちと一緒に歩いていたら、こつちはダメじゃないか」



なんて、そんなのは普通の現実だ。そういうところと違うんだ、キリストの世界は。

どうぞ、頭で分かるような現実は本当の現実ではないですねからね。皆さん、聖書のこの現実というのは本当に凄いよ、福音書と使徒行伝のこの現実は。我々が同じ質の現実をとにかく体験していかなかつたら、つまらないですね。そうしたらもう楽しくてしようがないです、正直。楽しくて、力がきて、行き詰まりを知らない。いろんなことでつくわせば、相対的に行き詰まれば、逆に本当に行き詰まらなくなる。本当にこれは秘訣だよ。

「我一切の秘訣を得たり」

とパウロが言つたが、その通りです。時間が足りないの、へつたくれもない。大丈夫。そういうことで、まあ本当に、手品師よりか凄いことになる。ありがたい世界だね。それが本当に永遠を生きている人なんだ。永遠を生きている人。現在において本当に永遠をつかんでいる人。ひとつも憐くない。よく、聖書の中には、

「過ぎ行くものは……」

なんていうけれども、過ぎ行かないんです。過ぎ行つても、それが全部、現在化して力がくる。まあ、私は不思議でしようがないです、正直。

(参考)

A1 「わが道伴れ」

(1976年2月21日作、讃美歌527「わが喜びわが望み」の曲で)

- 1 わが道伴れわが情け
わが旅路の主よ
なやみにも苦しみにも
わが力の主よ!
- 2 わが道伴れわが情け
わが天路の主よ
山を越え 谷を渡り
偕に進みたもう!
- 3 わが道伴れわが情け
世の救いの主よ
わが身をもわが魂をも
捧げつつ進まん!
- 4 わが道伴れわが情け
旅路の峠を
幾たびも越えに越えん
あまか
天翔ける日まで!

